

本書は、日高郡藤井で代々酒造業を営みながら、江川組大庄屋から天田組大庄屋になった、瀬戸家八代目左太夫こと、瀬戸周菓の武蔵への吟行記ですが、この周菓は元来「雅趣に富みて俳句を好み、松尾塊亭に師事」（貴志康親著『紀州郷土芸術家小伝』所収）したと言われる人物で、天保二年（一八三一）八月に五十八歳で病死しています。彼は「文化十年比年三十前後にして、道成寺の築山に塊亭の句碑」（貴志康親著前掲書所収）を建てることを発起したとされています。

ところで、この乙卯（きのとう）という年は彼の生涯から考えると寛政七年（一七九五）ということになりますが、この年は彼が二十三歳の年であります。彼は享和元年（一八〇一）に江川組大庄屋代に就きますから、その六年前ということになります。

本書の冒頭に

今年秋も半端過る程に東武一見の思ひを果さんとてさるハ世用のいとなみに  
しもあらず云々

とありますが、若くして江戸への吟行を思いついたのは正解だったのかも知れませんが、とにかく、八月の末頃に藤井の里を出発して、住吉浦で最初の句を詠み、江戸に入るまでに十二カ所で句を詠んでいます。また、江戸では浅草寺、日暮里、隅田川、上野、両国、深川、増上寺などを廻り一ト月余り逗留していますが、隅田川のところで、前年の三月まで紀州を訪れていた児島如水と再会しています。児島如水という人物は『農稼業事』を著した農学者ですが、俳句も嗜んでいたようで、再会の喜びを即興で六句詠んでいます。如水はこの年八十八歳ですから、親子よりも年が離れていますが、同好の士との再会には年の差は余り関係がなかったのでしょう。

また、深川ではそこが松尾芭蕉が退隠後に最初の庵を結んだ場所であったことに思いを巡らせて、

道の恩 其水上の 深川哉

という句を詠んでいます。そして最後に増上寺に参詣後、

此地の逗留も早三十余に 及ふ物からさすかに古郷の したハしくしきり  
に帰国の 事を思ふてそこそこに暇を乞ひて 杖にわらしも取あへず立出  
る こととハなりぬ

として、慌てて帰国の途に付くことになりますが、この文句と後の餞別句から考えると、どうやら彼は江戸滞在中のうちのほとんどの期間を如水邸に逗留させてもらっていたようです。これは瀬戸家と如水の関係の深さを物語っているものでもあり、その証拠に瀬戸家には『農稼業事』も残されています。

さて、帰路には、熱田社、伏見、難波で句を詠んでいます。その後はいきなり帰郷となって、

住なれし 山里もよし 冬至梅

という句を詠んで、つつがなく帰れた喜びを、江戸の雑踏と比較しながら、山家暮らしの懐かしさを非常に素直な句にまとめています。それにしても長期にわたる旅であったことが分かる史料であります。

（文責：須山 高明）